

大藪遺跡発掘調査概報

昭和62年度

京 都 市 文 化 観 光 局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

西暦 794 年、平安京遷都とともに政治、文化の中心都市として千年以上も存続し続けてきた京都は、現在も大都市として躍進を続ける世界でも極めて希な都市であります。

昭和62年秋には、世界各国の著名な歴史都市の代表者が一堂に会し、世界歴史都市会議が京都市で開催されました。

会議では世界の歴史都市が持つ都市計画論、文化遺産論、都市産業論等の諸問題が討議され、また世界の古い歴史を有する都市において歴史都市会議を継続的に開催することが決議されるなど大きな成果をもって閉幕いたしました。

各々の歴史都市は、埋蔵文化財とは切っても切れない関係にあることが多く、市街地の中央に平安京跡を抱える京都市は、歴史都市の持つ典型的な事例であり、遺跡の保存と開発との調和が常に都市計画における重要な課題となっております。

京都市内で行われる数多くの埋蔵文化財調査では、考古学上貴重な成果を得ることも多く、京都の歴史や変遷を知る上から欠くことのできない貴重な発見が相次いでおります。

この概要報告書は、昭和62年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施いたしました、文化庁国庫補助を伴う埋蔵文化財調査報告であります。調査にあたっては数多くの方々の協力を賜り、また文化庁をはじめ多数の方々の御指導を受けました。

御協力いただいた方々に深甚なる御礼を申し上げますとともに、この報告書が京都の歴史をより深く知る資料として大いに活用されることを切に願うものであります。

昭和63年 3 月

京都市文化観光局

凡 例

1. 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市埋蔵文化財調査センターの委託を受け実施した文化庁国庫補助による大藪遺跡の発掘調査概報である。

2. 本書で使用した方位及び座標は、国土地理院「平面直角座標系Ⅳ」によった。

3. 本書で使用した水準高は、京都市遺跡水準局によった。

4. 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の2500分の1の都市計画基本図を調整したものである。

5. 発掘調査の担当者と参加者は以下の通りである。

調査員 長宗繁一・吉崎 伸・鈴木広司・牛嶋 茂（写真）・岡田文男（保存処理）

補助員 上田栄治・木下秀一・小寺末之・出口 勲・西大條 哲

6. 資料・遺物整理は鈴木が担当した。整理には補助員 出口 勲が参加した。

7. 本書の執筆・編集は鈴木が担当した。写真は主として牛嶋 茂が撮影し、遺構写真の一部を村井伸也（写真助手）及び担当調査員が撮影した。

目 次

| | 頁 |
|-------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2章 調査の概要 | 2 |
| 1 調査概要 | 2 |
| 2 遺 構 | 3 |
| 3 遺 物 | 6 |
| 第3章 まとめ | 11 |

図 版 目 次

| | |
|------|---|
| 図版 1 | 遺跡 1. 2区 竪穴住居跡全景 |
| 2 | 1. 2区 S D19・20検出面全景 2. 2区 S D20 |
| 3 | 1. 2区 S D19杭列全景 2. 2区 S D19杭列 3. 2区 S D19杭列断ち割り |
| 4. | 1. 2区 竪穴住居跡全景 2. 2区 竪穴住居跡南柱穴検出状況 3. 2区 竪穴住居跡東柱穴断ち割り |
| 5 | 1. 1区 S D19流路肩部 2. 1区 南壁断面 |
| 6 | 遺物 須恵器 杯蓋14・杯A12・杯B13 土師器 椀8・甕10 漆 器 皿2・3 木 器 折敷5 |
| 7 | 遺跡 遺構実測図（奈良・鎌倉時代） |

挿 図 目 次

| | 頁 |
|------------------|----|
| 挿図 1 調査地位置図 | 1 |
| 2 調査区配置図 | 2 |
| 3 1・2区断面図 | 3 |
| 4 竪穴住居跡実測図 | 4 |
| 5 竪穴住居跡南柱穴断ち割り | 5 |
| 6 S D 20出土漆器 | 6 |
| 7 S D 20出土折敷 | 7 |
| 8 S D 19出土土器 | 9 |
| 9 竪穴住居跡出土土器 | 10 |
| 10 石製品 | 11 |
| 11 久世中学校第7次調査・杭列 | 12 |
| 12 大藪村字名 | 14 |

第1章 調査に至る経緯

京都市南区久世大藪町234他の畑地が造成され、住宅が建築されることになった。同地は大藪遺跡に含まれるため、昭和62年4月21日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、約4000㎡の敷地に6箇所の調査区を設けた。これにより敷地の南西部はすべて平安時代以前の大きな自然流路であるが、敷地の中程では流路の護岸施設と考えられる杭列を検出した。また杭列を境に北東部は陸部となることを認めた。杭列は昭和58・60年度に調査地の北西に隣接する京都市立久世中学校で実施した発掘調査^{註1}で検出した北西から南東方向の流路の左岸に設けられた大規模な護岸施設（杭列が主体）に連続するものと考えられること、及び北東部の陸部に設けた調査区で弥生時代の溝状遺構を検出し、その付近から弥生土器を採集したことで、弥生時代の遺跡の存在も望めることがわかった。

試掘調査の結果について京都市埋蔵文化財調査センターは、原因者と協議を行ない、発掘調査が実施されるに至った。費用の一部は原因者が負担している。

発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和62年5月25日から、6月27日の期間に実施した。

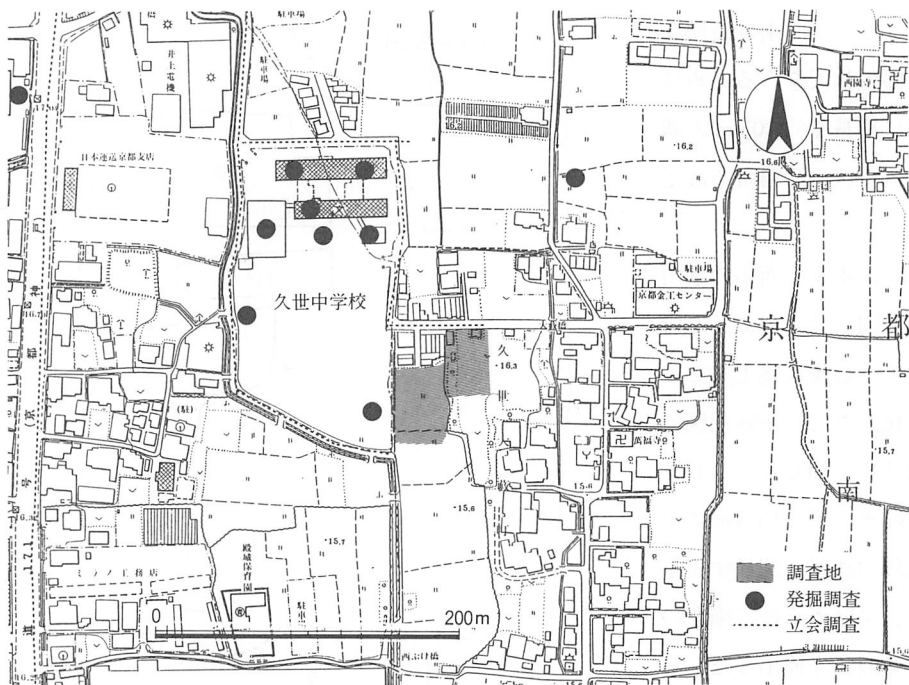


図1 調査地位置図

第2章 調査の概要

1 調査概要

調査地は桂川左岸の水田地帯にある。かつて大藪の集落が田畑の中に点在していたものであるが、昭和49年の久世中学校新設を始めとして、近年周辺の宅地開発が進み、さらに大規模な工場の進出などで、景観は変貌しつつある。

大藪遺跡は長岡京跡の北限に隣接し、また弥生時代から室町時代に至る各時代の遺跡を豊富に包含する中久世遺跡と一部を共有する位置にある。大藪遺跡はこれまでの発掘調査で室町時代の遺跡・奈良～平安時代の遺跡が確認され、縄文時代から室町時代にわたる遺物が採集されている。調査地は、大藪遺跡の中央部に近く、現存の大藪の集落の北西部にあたることから、遺跡の存在は十分に予想された。標高は北東の畑地は16.3m、南西の水田は15.6mで、調査地の中程の南北溝を境に段差がみられる。

発掘調査は、試掘調査の成果に従って、調査区の中程の杭列を検出した部分から弥生時代の溝を検出した部分にかけて約380㎡の調査区・2区と、そのすぐ南に流路及び肩部の状況を確認するために東西に細長く約105㎡の調査区・1区の2箇所を設定した。

1区は本来、西半の水田とほぼ同じ高さであった所に、中・近世に盛土をして畑地化したことが断面図で(図3)で伺える。これを取り除き、標高15.1mで中世以降の農耕に関する小溝と、2区から続く南北の濠・S D20を検出した。S D20は規模を縮小しながら

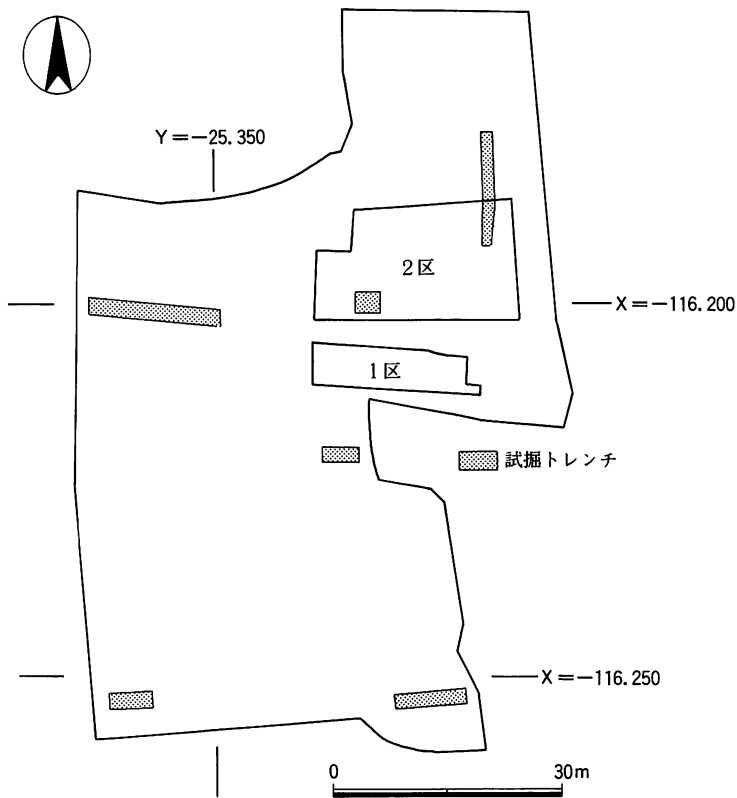


図2 調査区位置図

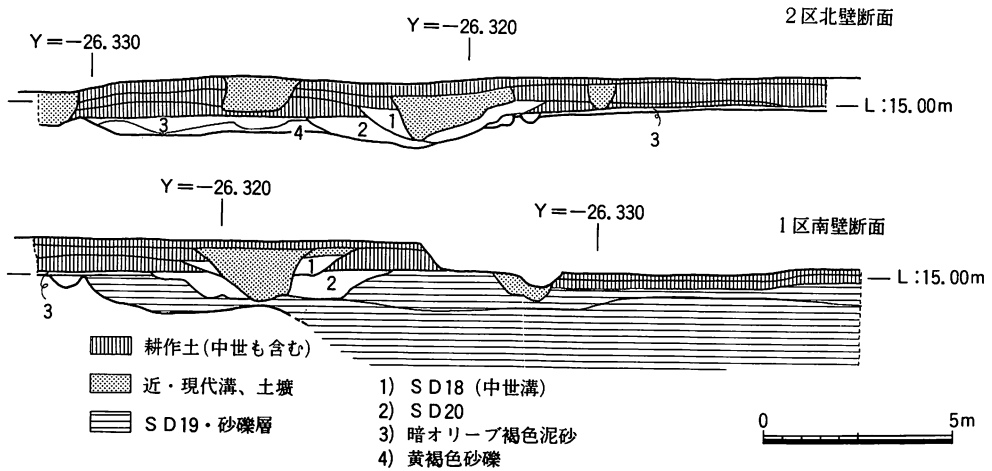


図3 1・2区断面図

同位置で、現代に至るまで受けつがれている。このうち1区は東端の一部を除き西半は流路・S D 19となり、砂礫の堆積が厚く続く、断ち割りを行なったが川底をみるには至らなかった。砂礫層は全層にわたって弥生時代から平安時代初期の遺物が出土する。

2区も同様の盛土がみられ、直下で数条の小溝と、南北濠S D 20を検出した。S D 20の成立面は全体に西下りの傾向を持つ。調査区の南西部ではS D 19の護岸施設の杭列がある。北西から南東の傾きを持ち、標高14.4mで流路の肩部を掘り込んで成立するがS D 20の東側は標高14.8mで褐色泥砂がみられる。同層上で弥生時代の竪穴住居跡を検出した。

2. 遺構

S D 20 幅約6m、深さ約80cmの南北濠。砂泥・細砂の互層で、最下層に腐植土が堆積する。創設は鎌倉時代とみられる。底部から折敷の上に漆器の皿2・椀1枚が重なり、伏せられた状態で出土した。他に土師器・瓦器が少量出土している。この濠は、乙訓郡条里(川依里)の一坪の中程に位置する。東側の大藪の集落と西側の水田あるいは湿地帯とを隔てる濠であったことが考えられる。

S D 19 幅100mを越えると思われる自然流路である。ここではその護岸施設の杭列にのみ触れる。杭列の構造は、肩部の砂礫を長さ約9.5m、幅約3.5m、深さ約1mの長円形に掘り窪め、粘土と入れ換える。そこへ最前列の杭を打ち込んで行く、これに横材をからませてそれを保持するように斜めの杭を打つ。さらに立木の枝を払ったそのままに、葉がついた枝を透き間に押し込み、飛び出した枝などをまとめるように後方にも杭を打っている。しがらみ状をなすこの施設の背後を一旦埋め、60~80cm離して同様の工法をもって

第2列を設備する。これも背後に土を盛る。ついで第3列に、松材を主とした割木の短い杭を垂直に打つ。第3列は前列に較らべ、かなり疎らであり、横材もほとんど入れていない。こののちすべてを埋め戻し、さらに良質の黄褐色粘土で杭の前列から肩部までを杭が隠れるまで貼っていることがわかった。従って築造当時は、汀線を除き杭は見えなかったと考えられる。奈良時代初頭の遺構と推定している。

1区から2区に延びる杭列も類似した状況がみられる。砂礫層を長さ約10m、幅約3m、深さ40cmの長円形に掘り込み、粘土に入れ換える。ただし、こちらはS D20により杭列の大部分が消失している。また1区では同様の掘り込みが南へ、調査区外へ延びている。

竪穴住居跡 試掘調査で認めた弥生時代の溝は竪穴住居跡の壁溝の一部である。また弥生時代の遺構はこの一棟のみである。

住居跡は、西半をS D20などで失うが、対岸に柱穴1基をみる事ができた。一辺9.9~10m程の方形と考えられる。四本柱で、柱間は5.4mを測る。柱穴の2箇所に柱根が残る。掘形は直径0.7~1mの円形で、深さ約80cmに掘られる。ここに礎板を敷き、底部を平らに加工した柱を据えている。柱根は残存直径45cmと28cmで太い。用材の種類はムクロ

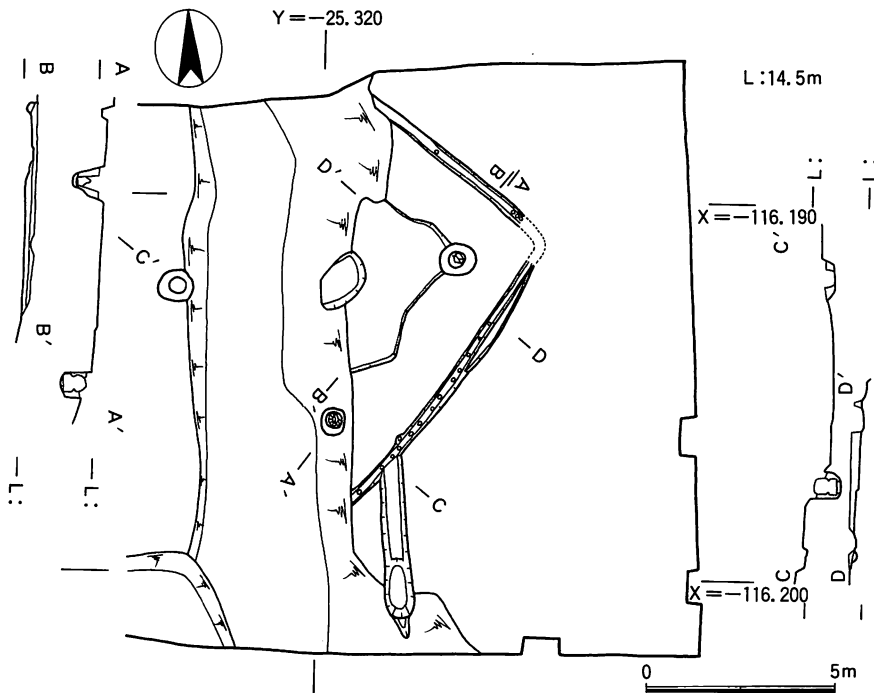


図4 竪穴住居跡実測図

ジである。外面は手斧でていねいに削られ、また先端部に運搬するために彫られたと思われる切り込みが一周する。

住居跡の壁に沿って、壁溝が廻る。幅30～35cm、深さは床面から10～20cmで、東隅が浅くここから北と南に向って深くなる緩傾斜をなしている。溝内には直径10cm未満の杭痕が20ヶ所近くみられる。南隅近くに、壁溝には直交せず真南に延びる排水溝が付属する。幅60～65cmで、長さ4.8mを認めた。深さは北端が壁溝の底よりやや浅めで、南に向って徐々に深くなり、南端部で約50cmを測る。

床面は部分的に貼り床される。厚い部分でも5cm程で床のやや窪んだ部分を少量の土で補修した程度とみられる。また床面は堅固に踏み締めた状況はみられない。柱筋を境にして内側が低くなっており、深さは検出面より北東部は約15cm、中央部で約30cmを測り、明瞭な段差がみられる。焼土・炭などが東の柱穴より西側に薄く拡がるが、炉あるいは竈などの痕跡は認められなかった。

埋土は単一ではないが、基本的には褐色泥砂がほぼ水平に堆積している。中央部の低い部分は暗灰褐色泥砂がみられる。壁溝は灰黄褐色泥砂で、床面と同じ高さまで堆積している。排水溝は黒褐色泥砂で、溝の下層に小礫が若干混入している。

この住居跡は近畿では類例の少ない規模を持っている。この規模は一搬の人々の住居ではなく、むしろ特殊な階層の人の住居、あるいは集会場・儀式場といった性格を持つものと考えたい。独立した住居跡であり少なくとも調査区内では他の住居跡のみならず、弥生時代の遺構はまったく認められなかった。またこの住居跡の西側には真近に河が流れていることから、この住居跡を含む集落の本体は東方(大森の集落)、北方(弥生時代の遺構^{註2}を検出)に拡がっているものと考えられよう。

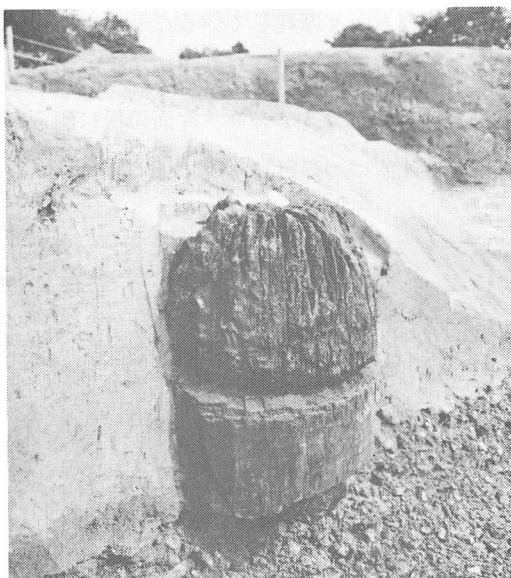


図5 竪穴住居跡南柱穴断ち割り(北西から)

3. 遺物

弥生時代から室町時代に至る各時代の遺物が出土した。土器類は弥生土器・土師器・須恵器と少量の黒色土器・瓦器・国産陶器類がある。この他には石製品・漆器・木製品と2本の柱根、多量の杭がある。遺物の出土は自然流路S D19が最も多く過半数を占める。竪穴住居跡出土遺物がこれに次ぎ。S D20他の中世遺構から出土の遺物は極く少量である。それぞれの時期を代表する遺構の遺物を取り上げ若干の説明を加えたい。

S D20出土遺物 若干量の土師器・瓦器がある。出土土器の特徴や、室町時代以降の遺物がみられず、また室町時代の土器を含むS D18などに切られることから創設を鎌倉時代と考えている。土器類に図示できるものがなく、ここでは漆器・折敷にふれる。

1. 漆器椀 口径14cm、高さ6.1cm。丸味を帯びたやや深めの椀で、低いめの輪高台を削り出す。器壁は底部に向って薄くなる。全面に黒漆が塗られ、外面と内面の見込み部に朱漆で山水画調の絵柄が筆描きされる。

2・3. 漆器皿 口径13cm、高さ2.5cm程。器壁はやや厚目で、見込み部に段を有し、幅5mm程の高台を削り出す。全面を黒漆で塗ったのち内面に朱漆を上塗りする。両者とも底部外面に刃物で文様あるいは記号を彫り込んでいる。

これらの漆器は轆轤挽きもていねいで、漆も斑なく均一に美しい光沢を持って塗られるが漆膜は薄く上質の品であることが伺える。また畳付の漆が擦り減り禿げていることや、内面の漆膜も所々摩耗していることなど使用頻度が高かったことを物語っている。

4・5. 折敷 一辺27~27.4cmの隅丸正方形。厚さ3mm程に薄く剥ぎ取った板目板を2枚、木目方向を違えて合せ、片面の縁に廻らされた5×8mmの角材と共に桜皮で各隅3ヶ所、間1ヶ所ずつの計16ヶ所で留る。これ以外、板を貼り合わせる為の細工はみられない。

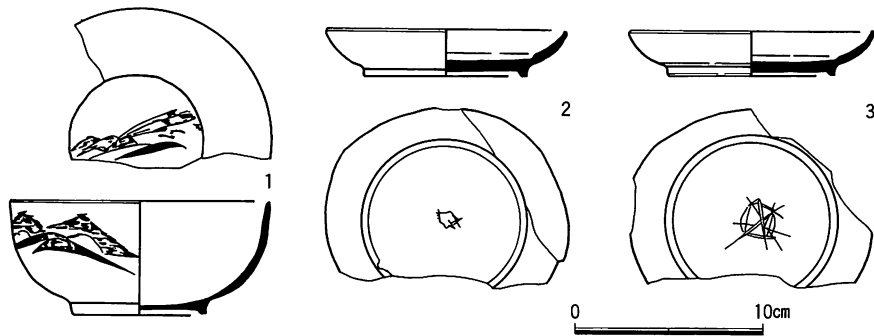


図6 S D20出土漆器

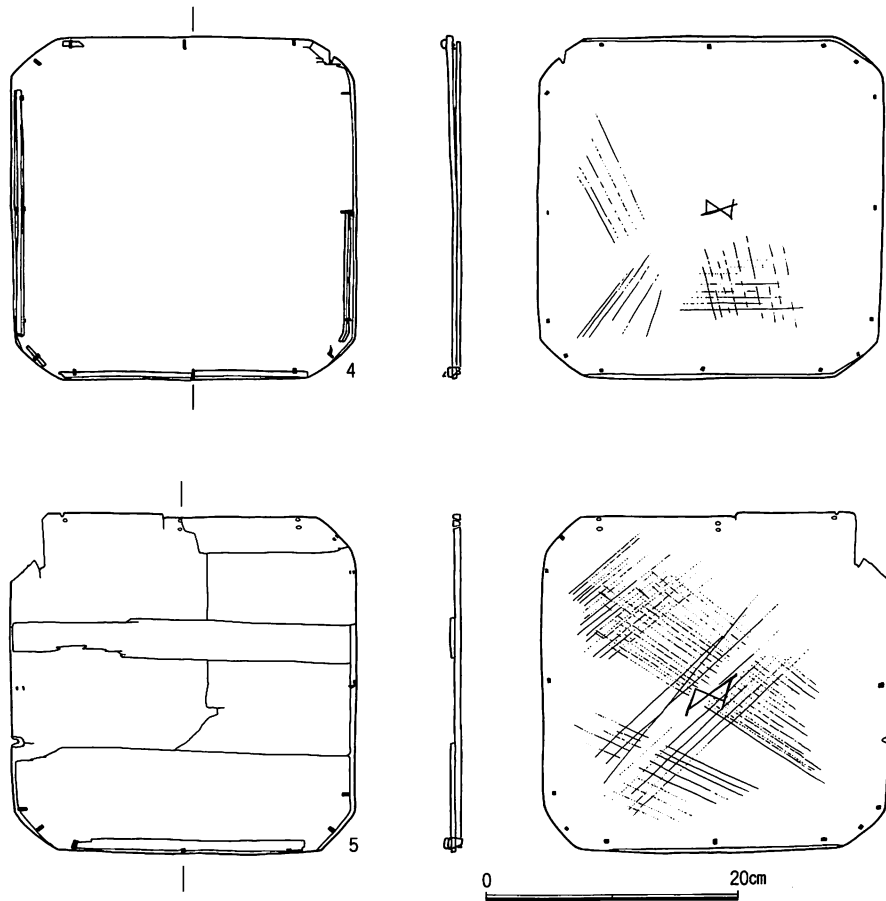


図7 SD20出土折敷

側板を有する痕跡は認められず、縁に廻らされた小角材が側板を意識するもので、こちらが内面である。裏面は刃物傷が無数についており、組板に使われたかも知れない。中央に2つの三角形の頂点を合せたいわゆる「二つ鱗紋」状の文様が彫り込まれる。

SD19出土遺物 流路内から多量の弥生時代・古墳時代・奈良時代・長岡京期から平安時代初期の遺物が出土した。杭列の築造期に紛れ込んだものは遺存状況が良好であるが、流路内のものはほとんどが摩滅している。原形を保つものは少ないが観察可能なものの一例を図8に示した。6・7が弥生土器、8～11が土師器、12～17が須恵器である。

6. 高杯 口径19.8cm、脚部以下を欠損する。浅めで外に開いた口縁部が若干外反気味に延び端部に至る。胎土はにぶい橙色で、小石・砂を含みやや粗い。弥生時代後期。

7. 壺 口径17.6cm、口頸部のみ。口縁部は屈曲し上方に至る。端部は強く内傾する。

口縁帯に刺突文を飾る。胎土は灰白色で、小石・砂を多く含みやや粗い。弥生時代後期。

8. 杯 口径12.2cm、高さ4.1cm。完形品で摩滅は少ない。底部外面をオサエ、他をナデ調整する。器壁が厚く、丸味を持った器体そのまま端部に至り丸くおさまる。胎土はにぶい橙色で、砂を若干含むが密である。古墳時代後期。

9. 杯 口径16.8cm、底部を欠く。わずかに外面のヘラミガキ、内面の放射状暗紋が残る部分がある。内湾気味の体部に外反する口縁部が続く。端部が肥厚し内方に突出する。胎土は橙色で、若干砂を含むが密である。奈良時代。

10. 甕 口径13.8cm、高さ10.5cm程。体部の中程に最大径があり、ずんぐりしている。口縁部内外面をナデ、胴部外面は上半をタテ方向のハケ、最大径部より下半をヨコ方向のハケ、底部をヨコ方向を主とした不定気味のハケで調整する。ススが外面全体に付着する。内面は中位までヨコ方向にナデを施す。下半はオサエのみで、指頭痕の凸凹がそのまま残る。胎土は淡い茶褐色で、若干小石・砂を含むが密である。奈良時代。

11. 甕 口径15.6cm、高さ12cm以上。卵形の胴部と直線的に開く口頸部を持つ、端部は外方にわずかに肥厚する。口縁部は内外面のハケをナデ消す。胴部は外面をタテ方向のハケ、内面にヨコ方向のハケを施す。胎土は灰褐色で、砂を含むが密である。古墳時代後期。

12. 杯 口径12.6cm、高さ3.7cm。体部外面に意味不明の墨書がある。底部はヘラキリのままで、他はナデで調整する。胎土は灰白色で、少々長石粒などを含む。奈良時代。

13. 杯 口径13.3cm、高さ4.6cm。底部から口縁部が、開き気味に立ち上る境より内側に、撥形の断面形を持つ高台が貼りつけられる。底部はヘラキリのままで、他はナデで調整する。胎土は灰色で、小石（長石など）、砂をかなり含みやや粗い。奈良時代。

14. 杯蓋 口径15.2cm、高さ5cm弱。笠部をヘラケズリ、口縁部にナデを施す。その境にごく浅い凹帯が廻らされる。内面はナデで調整する。口縁端部は内傾し、そこに浅い沈線がみられる。胎土は灰白色で、砂をかなり含みやや粗い。古墳時代後期。

15. 杯身 口径10.8cm。三角形に張り出した受け部と、長めのたちあがり部を持つ。底部外面は受け部の近くまでいねいなヘラケズリを施している。他は内外面ともナデで調整する。胎土は暗灰色で、小石・砂などをかなり含みやや粗い。古墳時代中期。

16. 壺 口縁部・底部を欠く、最大径15.2cm。肩部に浅い凹帯がある。上半をナデ、下半を回転ヘラケズリで調整する。胎土は暗灰色で、細砂を若干含むが緻密。古墳時代後期。

17. 甕 口径17.8cm、最大径41cm。卵形の胴部に、ほぼまっすぐ立ち上る口頸部で、端部は内傾しわずかに内外に肥厚する。口縁部はナデ。胴部外面は平行叩で、部分的にヨコ

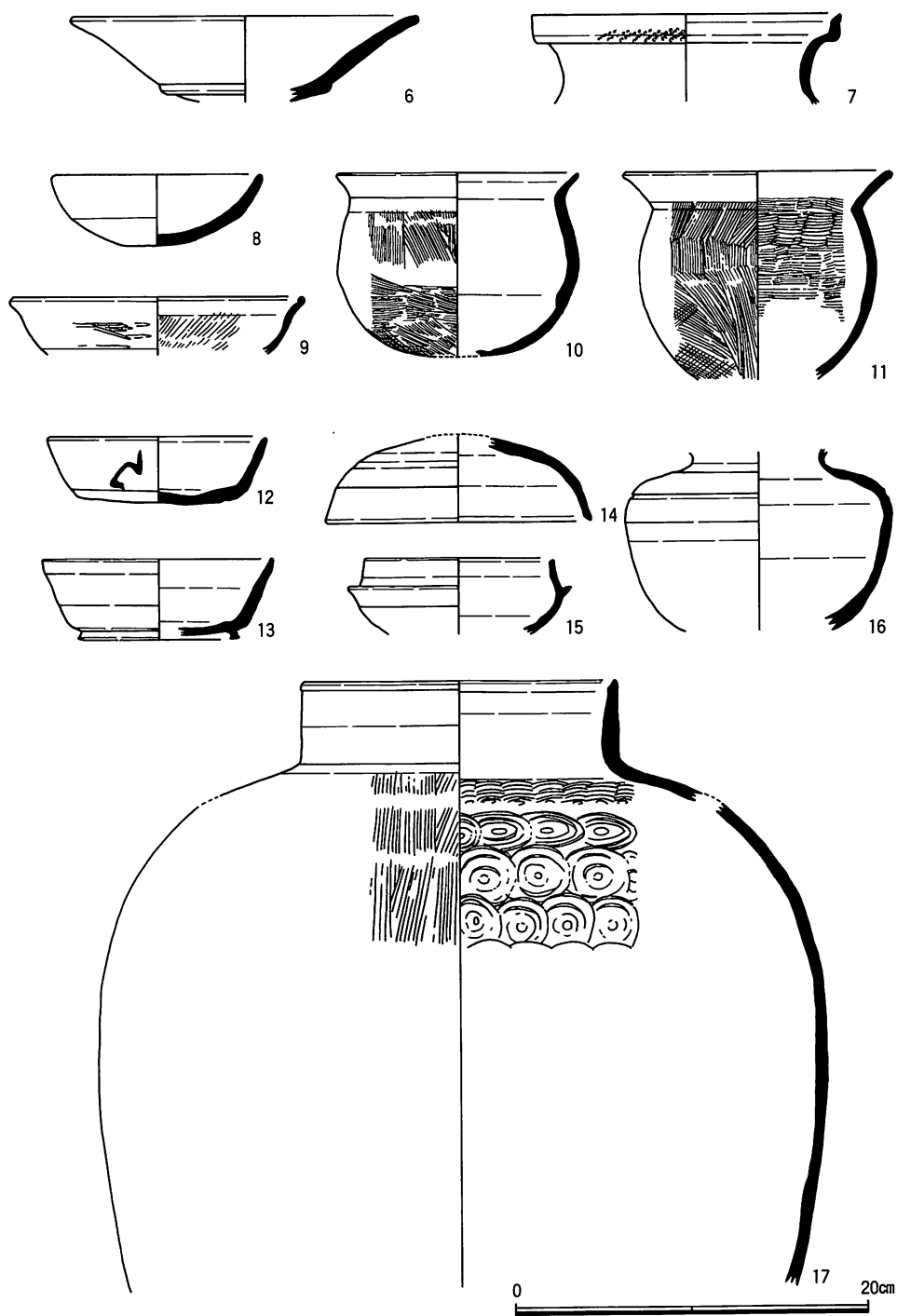


图8 S D19出土土器

方向のカキ目がみられる。内面には青海波がみられる。胎土は灰白色で、砂を若干含むが密である。平安時代初期。17はS D19の最終埋土から出土している。

この他、石器未製品・図10—24がある。チャート質で、わずかに加工痕がみられる。

S D19は弥生土器・土師器・須恵器が出土した。瓦は一片も出土していない。総出土破片数は1894片で、このうち土師器が886片(46.78%)・須恵器が234片(12.35%)・弥生土器は774片(40.87%)の割合である。

土師器は図示した器種その他、奈良時代・平安時代初期の皿・杯・高杯・壺B。古墳時代の高杯・壺などが少量みられるが概して器形の多様性に乏しい。須恵器には奈良時代・平安時代初期の皿・杯蓋・壺。古墳時代の甕がみられるが、器形は限られている。用途別では土師器・須恵器とも食器類が少ない(土師器約18%、須恵器約11%)数値を示す。

弥生土器はこの他、甕・器台がある。時期的には弥生時代後期(畿内V様式)に属するものが中心となっている。ここで注目されるのは出土量の多さである。久世中学校で同じ流路の調査を行なっているが、最も大規模に杭列・流路を調査した第7次調査と比較すると比率では3倍に近い。これは今回検出した住居跡と関連するものと思われる。

なお、杭列内から出土した土器類は少量であり、また図示可能なものはなかった。しかし、その特徴をみとれるものがある。杭列は製作時と大差のない部分が残っており、創設の時期の限定がその遺物から可能である。ここでは奈良時代の土器が出土している。

竪穴住居跡出土遺物 大量の弥生土器片と1点の石鏃がある。遺存状況は不良で摩滅が激しく、器形・手法のわかるものは少ない。観察可能なものの一部を図に示した。

18. 壺 口径11.6cm。胎土は淡赤褐色で、黒・白の小石・砂を多く含みやや粗めである。

19. 壺 口径13cm。口縁部はまっすぐ上方に延び口縁帯をつくる。文様などの有無は不明。胎土はにぶい橙色で、小石・砂などを含みやや粗い。

20. 壺 底径3.6cm。中央が不整形に窪む。胎土は灰白色で、砂をかなり含むが密。

21. 甕 底径3.8cm。斜方向の粗い叩き目がみられる。底部は不整形でやや窪む。胎土は橙色で、長石・石英などの小石や砂をかなり含む粗い。

22. 台脚 台部径7cm、高さ3.5cm。鉢か壺の脚と考えられる。脚部は開き気味にまっすぐ下方に延びる、端部は丸い

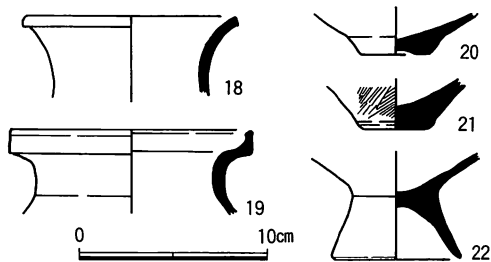
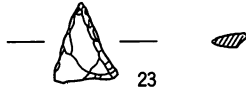


図9 竪穴住居跡出土土器

が摩滅のせいかもしれない。胎土は灰白色で、赤・白・黒色の小石・砂を多量に含み粗い。

23. 石鏃 長さ約2cm、最大幅1.8cm、厚さ4mm。
二等辺三角形形状であるが、やや左・右が不均衡である。
刃のつけ具合も雑である。チャート質。



住居跡から弥生土器1168片が出土した。原形をとどめるものはまったくなく、接合できるものも少ない。ほとんどが摩滅した小片で、かつ遺存状況も悪く溶解する寸前ともみえる。それでもある程度、器形の類推できる破片が2割近くみられる。手法・文様などについては観察できる状態でない、特に文様は本来的に付けられていないのか、風化したものかの区別ができない。胎土は灰白色

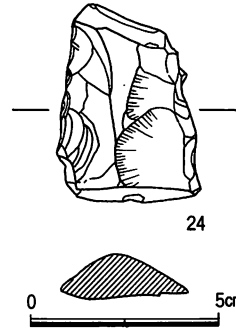


図10 石製品

から茶灰色をなすものが多く、長石・石英粒を主として、小石や砂を多く含んだ粗いものと、砂を少々含むものやや密にまとまったものがある。

器形には壺・甕・高杯・鉢・器台がそろっている。量的には甕ついで壺が多く二者でほとんどである。壺・甕とも口縁形態に多様性は少ない。高杯に杯部片が4点ある、いずれも杯部の中程に稜を有し、外反気味に口縁部が広がるタイプである。器台は口縁端部が上下に肥厚し、口縁帯の凹帯上に円形の貼浮文を持つものと、体部中程に円形の透しを持つものの2点のみである。

いずれも弥生時代後期・畿内V様式に収まるものと考えている。

第3章 ま と め

隣接する京都市立久世中学校では、これまでに8次の発掘調査が実施されている。そのうち4回の調査を京都市埋蔵文化財研究所が担当している。第1次は、久世中学校（当時は乙訓第3中学校）^{註3}新設に際して六勝寺研究会が実施されたもので、これで杭列と流路を最初に認めている。これに続く調査で、西側の体育館新築予定地で長岡京発掘調査研究所^{註4}が行なわれた調査と、当研究所が同校の南東隅のプール新設予定地^{註5}で行なった調査において自然流路を確認している。また同校の北東部の校舍増設予定地^{註6}で行なった調査では、黄褐色泥砂からなる遺構面を認めた。これにより第1次調査で認めた杭列が、流路と陸部の境となることが明らかになった。第7次調査で、この杭列に連続するがさらに大規模とな

る杭列と自然流路を検出した。ついで東側の第8次調査でも杭列の続きを認めている。

第7次調査で検出した杭列は長さ25m、幅3.5mを測る。東端は調査区の南東部からさらに東へ延び、西端は調査区の中程で二股に分かれ、一端は北へ急激に折れ曲り、もう一端はそのままの角度で北西へと続いている。杭列はおよそ3列に大別できる。前列は非常に密に打たれ、堅固に組み上げられている。構築方法自体は前章のSD20で記したやりかたと同様であるが、こちらは大規模で、用材は長いもので4m、太さ15cmを測り、通常の杭で2.5～3mの長さを持つ。横材も枝などではなく丸太・角材（廃棄建物からの転用材もみられる）を使用しており、組み方はいっそう複雑である。この列が北西へ延びる。中列は規模を減じているが、それでも2m余りの杭をかなり密に、垂直に打ち横材・枝などをしがらみ状に構成している。後列はさらに杭も短かく簡易である。中・後列が北へ折れる。これらの施設は幅4m、深さ2m以上に砂礫を溝状に掘り込み造られている。おそらく同地付近が流路の屈曲部にあたり、急な流れ・水量に対抗するためにはこのような大規模な工事を必要としたのであろう。

この杭列は久世中学校の東側、今回の調査地との間の道路と、同校北西の南北道路の大阪ガス・ガス管理設工事に伴う立会調査でも確認しているが、ここでは既に杭列の規模縮少が行なわれている。水流が緩くなり、今回の調査地においても岸辺の侵食を防ぐにもさほど大規模な施設は不要となったのであろう。

以上久世中学校で検出した杭列は、今回の杭列で全長250mにおよび、規模こそ違え同様の工法がとられ、同じ役割を担っていることがわかった。また築造年代も奈良時代と結論していたものが今回でも証明されたことになる。

さて、上記の調査においても常に流路から弥生土器を採集しており、弥生時代の遺跡の存在は予想されていた。

北西は上久世・中久世の弥生時代から

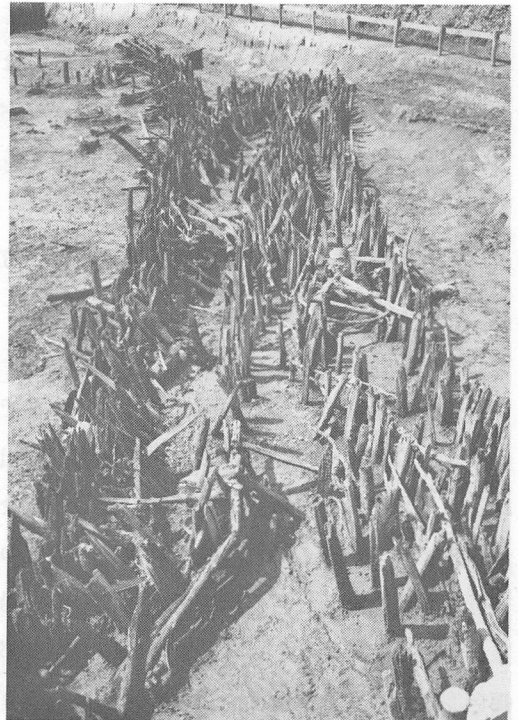


図11 久世中学校第7次調査・杭列（南東から）

室町時代に至る時間的にも長く、遺構にも多様性を持つ広範囲な遺跡と、南に東土川の弥生遺跡が控える大藪遺跡では、発掘・立会調査で若干の弥生時代の溝などを見ることができたが、明確な遺構として、それも竪穴住居跡をみることができたのは幸である。既に触れたようにこの住居跡は一般的なものでなくやや特異な状況を示している。これまでの調査の成果から、この集落の本体は現大藪村と同位置にあると考えられよう。微高地で安定した地盤を持つ同村付近では当然のこととも思われる。

また今回は弥生時代後期に属する住居跡を検出したが、流路は中期の遺物も出土すること、調査地の北西 150 m 程の地点で縄文時代後期の遺物が認められていることから今後さらに幅広い時期の遺跡が見つかる可能性がある。

南北濠 S D20は中世の大藪遺跡を考える上で大きな意味をもつ。

文献上の大藪村の初出は、^{註7} 暦応3（1340）年11月、上久世庄公文沙弥道法が領家東寺に進上した「上久世庄絵図」（教王護国寺文書）に『本久世 大ヤフ』としてみられ、この頃すでに大藪庄（本久世庄）は小規模ながらも荘園として成立していたことが知れる。



大藪庄は北に上久世庄、東は築山庄（東久世庄）に隣接し、南方には久我上・下庄を控える位置にある。領主は久我家であることが「久我家文書」観応3（1352）年7月24日付足利義詮御教書に『当庄（久世庄）内大藪村院田八名事』にみられる。上・下久世庄のごとく室町時代の初期に東寺領に包括されるのではなく、久我家の支配は受けながらも一種の独立した村落として室町・戦国時代を生き抜いていったと思われる。以降大藪庄は桂川からの取水をめぐる水争いに何度かその名がみられる。

これを今回の調査の成果などを加え推論した。南北濠 S D20は成立期が鎌倉時代に求められ、大藪村の文献上の初出に遅れることはない。S D20は条里の一坪を東西にほぼ2分する位置にあり東側の村と、西側の河川跡の生活に適さない湿地帯とを区分している。また湿地帯はかなり広範囲で大藪村の西方には、彼方の寺戸庄、南西の鶏冠井庄に至るまで荘園がみられない。湿地帯はすでに水脈を失っており、故に幾度も水争いを起す必要があった。また濠を軍備・灌漑両用で掘る必要があったものと思われる。しかもこの濠は永年同位置に受けつがれ、手入れも十分にされている。そのためか、出土遺物は少ない。

S D20が環濠となるか否かは、およそ想像の域を出ないが、^{註8} 周辺には久我東町遺跡・城ノ内遺跡の中世環濠集落の調査例があり可能性は高い。今後の調査を待ちたい。

大藪村の旧字名を図12に示した。今回の調査地は「奥街道」の西の外れにあたり、集落の北西の隅である。やはり太線より西側は水田で、中世集落の主体は「城屋敷」・「里ノ

内」の字名の残る地域であろう。

ついでに、これは空想の域を出ないが、S D20出土の折敷・漆器皿の底部に刻まれた「」（二つ鱗紋）は北条氏の家紋「」（三つ鱗紋）の系譜を引くものとされる。ところで上・下久世庄は鎌倉時代を通じ、また末頃は北条得宗領であったことが「東寺百合文書」貞和2（1346）年12月27日東寺政所上久世庄定書案によって知られる。鎌倉幕府の滅亡に伴い領地はその手を離れている。これから大藪庄の開始を北条氏の一族に関連する人物に寄せることはあまりに無謀であろうか。

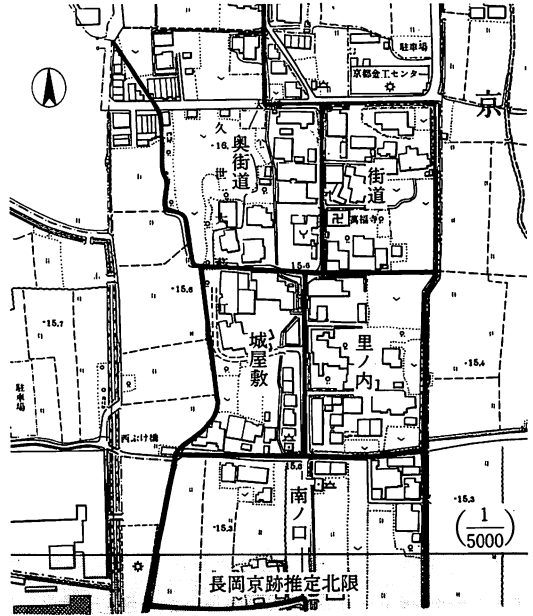


図12 大藪村字名

繰り返して述べているように、弥生時代

の集落も、中世庄園も、現大藪村の下に展開するであろう。また、そこに護岸施設に対応する遺構の存在も全くは否めない。豊富に埋蔵文化財の眠る地域である、従って今後の大藪遺跡周辺の開発行為などには一層の注意が必要とされる。（鈴木 廣司）

註

註1) 「京都市埋蔵文化財調査概要」昭和58年 財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、当研究所と略）。昭和60年度分は現時点で未報告。

註2) 「大藪遺跡発掘調査概要」昭和55年 当研究所。弥生時代中期の溝の他、鎌倉～室町時代の建物跡・井戸跡、乙訓郡条里に関連する溝などを検出している。

註3) 「大藪遺跡」1972年 六勝寺研究会

註4) 昭和48年に調査された。昭和48年度「考古学協会年報」

註5) 「京都市埋蔵文化財調査概要」(発掘調査編)昭和56年 当研究所。

註6) 昭和54年に当研究所が発掘調査を実施した。

註7) 「京都市の地名・日本歴史地名大系27」1979年 平凡社。

註8) 「京都市埋蔵文化財調査概要」昭和59年 当研究所。

註9) 「仏教芸術No.115」1977年 毎日新聞社。

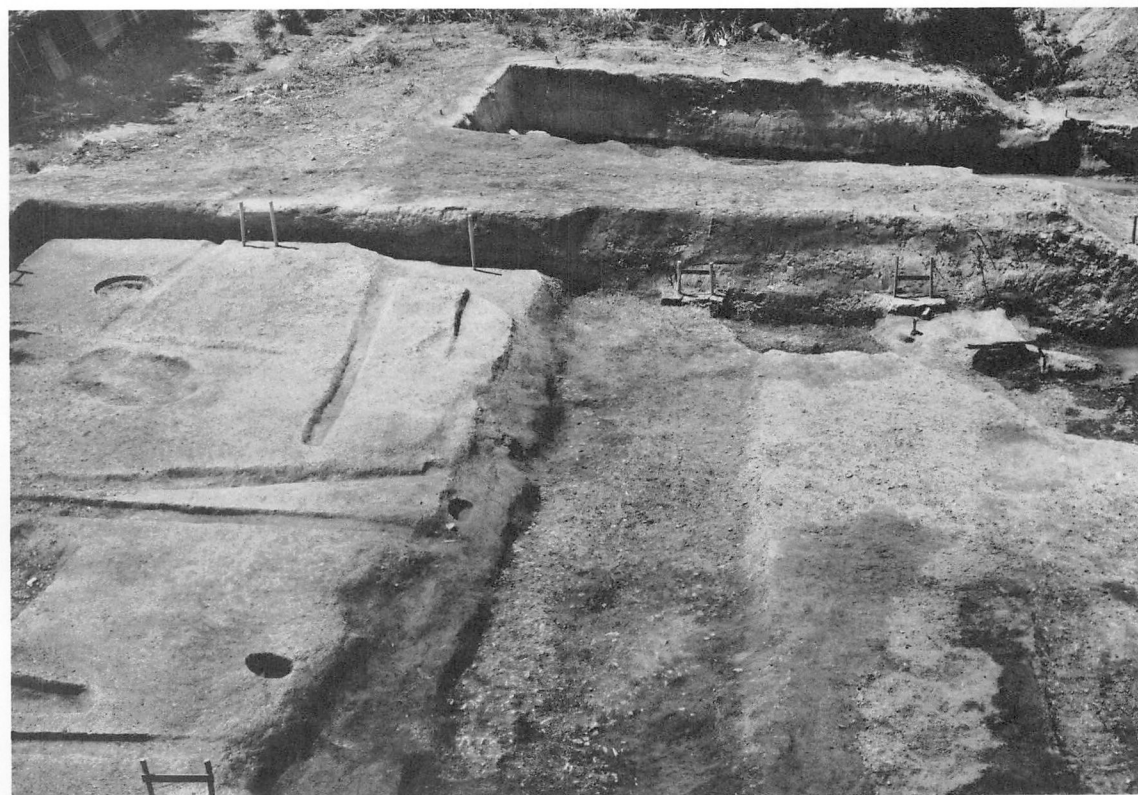
圖 版



1 2区 竪穴住居跡全景（北西から）



1 2区 SD19・20検出面全景(北から)



2 2区 SD20(北から)



1 2区 S D19杭列全景 (北西から)



2 2区 S D19杭列 (西から)



3 2区 S D19杭列断ち割り (東から)



1 2区 竪穴住居跡全景 (北西から)



2 2区 竪穴住居跡南柱穴検出状況
(南西から)



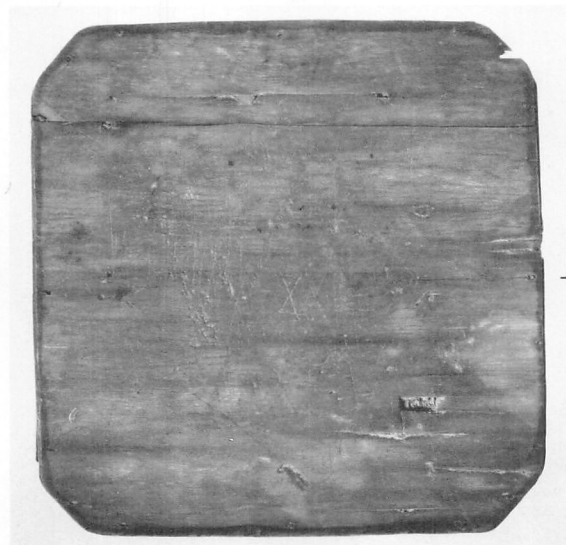
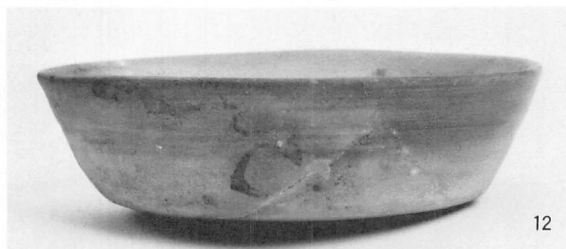
3 2区 竪穴住居跡東柱穴断ち割り
(北西から)



1 1区 S D19流路肩部 (北西から)

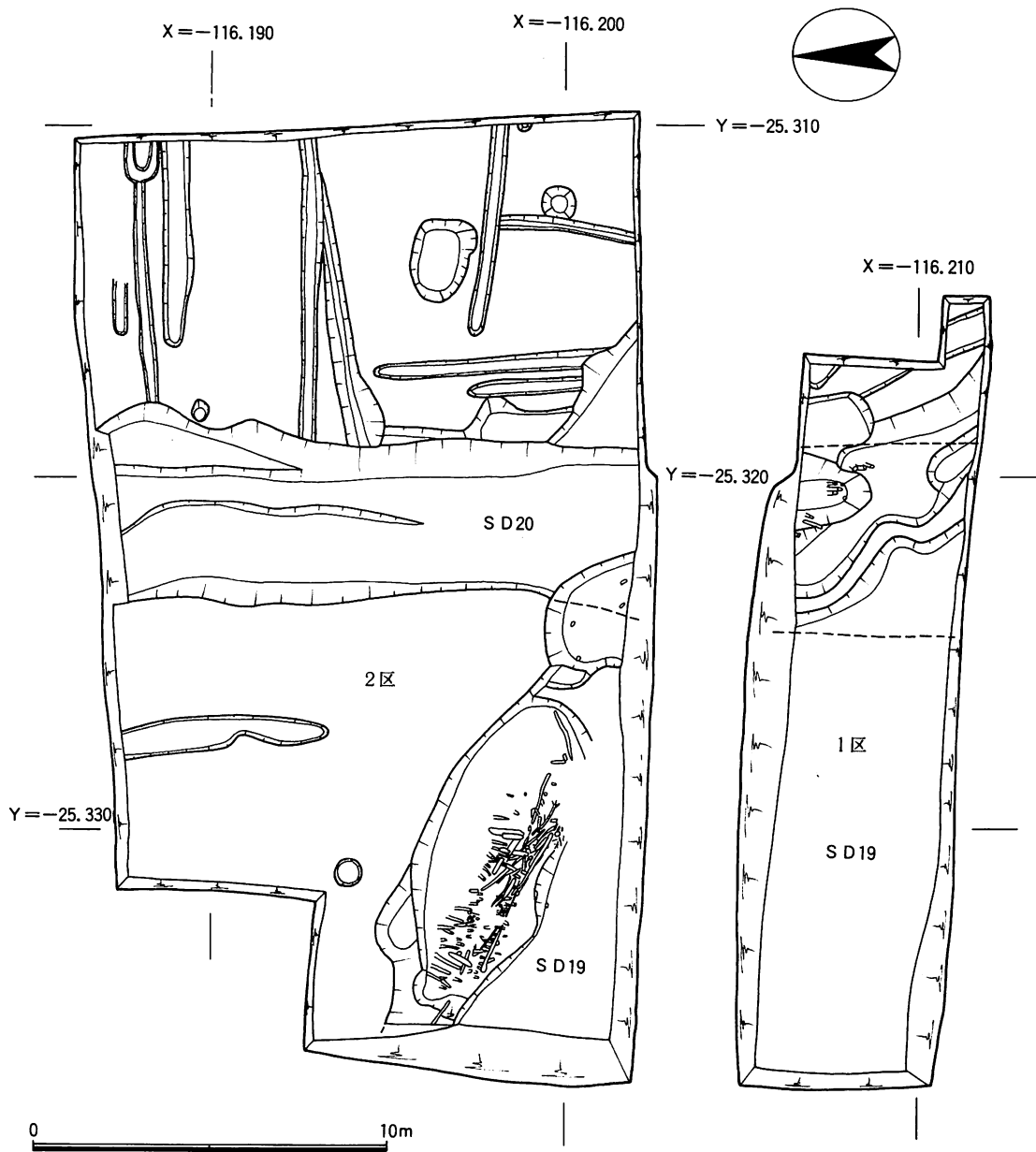


2 1区 南壁断面 (北から)



出土遺物 須惠器 杯蓋14・杯A12・杯B13
漆器 皿2・3 木器 折敷5

土師器 碗8・甕10



遺構実測図 (奈良・鎌倉時代)

大藪遺跡発掘調査概報

昭和62年度

発行日 昭和63年 3 月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社